

1年 1組 番名前

好奇心 中間 考査 予想 問題 作成 プロジ エクト

「好奇心」か、「街角のエコロジー」のどちらかを選んで、中間 考査 予想 問題 を作成する。

●必ず黒ペンで記すこと。
●設問と、正解例と解説を記入すること。

●●●●●
●1人1問作成し、みんなが「この問題を作ってくれて良かった。」と感謝される問題を作成する。
良い問題は、一つにまとめて「予想問題」としてみんなに配布する予定です。また、全ての人のワードシートをweb上で閲覧できるようにするかもしません。（パスワードによる閲覧制限を設けます。）

◎次の文章について後の間に答えなさい。

(1)普通「好奇心」などというと、あまりいい意味に取られない場合が多い。何かおもしろいことはないかと知らなくともいいことまでむやみに穿鑿する心、あるいはもの好きといったような意味に解されている。けれども好奇心とは、私たち人間の知的活動の根源をなす情熱、つまり知情熱にほかならない。

(2)好奇心というとあまりいい意味に取られない、と言つた。

(一) 実はそれ以前の、情熱(情念、パトス)そのものが、これまで一般に長い間、はしたないものとされてきたという事情がある。情熱は人間の心の平静を乱し、人間を真理から遠ざけるものだとされてきた。しかしそのような見方はきわめて一面的なものでしかない。『百科全書』の編者として知られるディドロが、その点で大変適切なことを言つていたのを思い出す。

(3)すなわち、ひとは①情念(情熱)の悪い面ばかりを見て、むやみに情念を排斥する。しかし情念は、一方であらゆる苦悩の源であるだけでなく、同時に他方では、あらゆる喜びの源泉でもある。偉大な情念によつて初めて、人間の魂は偉大な物事に到達し得るのである。これに反して控え目な感情は凡庸な人間を作り、弱々しい感情は最も優れた人間をも台なしにしてしまう。「控え目にばかりしていると、自然の偉大さとエネルギーが失われる。樹木を見るがいい。豊かに葉を茂らせているそのおかげで、諸君たちはさわやかに広がつた木陰を得ることができ、冬がやつてきてその茂つた葉がなくなるまで木陰を愉しむことができる。およそだれでも、小心翼翼として生き、気持ちが老い込んでしまうと、もはや詩作にも絵画にも音楽にも、優れた仕事ができなくなるのだ。」もつともディドロは、このような主張の前提として、「感情のうちに正しい調和が確立されている限りのことだが。」と述べることを忘れていない。

(4)控え目な感情は凡庸な人間を作り、人は小心翼々としていると創造的であり得なくなる。これは行きすぎた抑制や禁欲的態度が陥りやすい陷阱を示している重要な指摘である。言うまでもなくそれは、詩・絵画・音楽といった狭い意味での芸術にかかるだけではなく、もっと広い人間の知的活動や精神的活動にもかかわっている。だから、たとえどんな小さなことにせよ、日に日に発見や創造の喜びを持つて生きていくためには、通常考えられているより以上に、知情熱としての好奇心を生き生きと保つておかなければならぬのである。

(5)ところで、知情熱としての好奇心とは、とくに、私たちが世界や自然や物事に向ける強い関心のことである。そして、知識よりも何よりも関心(インタレスト)こそがあらゆる文化や学問の原動力である、と言えそうだ。関心こそが知を拓くのである。たとえば、次のような事実がある。すなわち、私たち人間の文化の根幹を形作っているのは言語や概念の体系であろうが、それらの体系の精密度は文化によって違う。といつてもその違いは、その文化や社会に属する人々の知的能力の差によるのではなくて、細部の物事にまでどれだけ関心を示すかという、関心の強さの差によるのである。この重要な事実を説得的な形で示してくれたのは、レビュリストロースであった。

(6)すなわち、それは女性の人類学者の体験談として示されている。彼女はアフリカのある部族の調査を行つたとき、まず最初に彼らの言葉を覚えようとした。その際、インフォーマント(現地人の情報提供者)たちは、初步の段階で植物の見本をたくさん集めてきて、それらを示しながら一々の名前を言うという形で、彼女に言葉を教えてくれた。それは彼らにとっては、ごく当たり前のやり方だった。ところが彼女には、それらの植物が識別できなかつた。なぜか。それらの植物が見慣れないものだったのでなくて、彼女がそれまで、植物界の豊かさや多様性そのものにほとんど関心がなかつたから

らである。それに反して現地人たちのほうは、そのような興味はだれでも当然持っているものだと信じていたのである。

(7) 彼女自身の言葉で言えば——「彼らにとつて植物は、人間と同じように重要で、また同じように親しいものでした。ところが私のほうは、農家の生活をした経験がなく、ベゴニアとダリアとペチュニアとを見分けることにも自信がなかつたのです。」「私が入り込んだ社会は、野生植物であろうと栽培植物であろうと、植物にはすべてはつきり決まつた名前と用途があつて、男も女も子供も、だれでも何百種という植物を知つているような世界でした。彼らほどに植物を知らうとしたところでどうてい私には不可能でしよう。そのうえ、たとえ私がそれを言つても彼らはそれが本当だとだれ一人信じてはくれないでしよう。」

(8) こうしてそこから、次のことが明らかになる。ものの分類、識別、命名を私たちに可能にするのは、何よりもそれに対する関心であり、興味である。したがつて関心や興味がまるでない場合には、いくら自分では意識的に知りたいと思つても、それを知るにはならない。こういう次第で、もし私たちが知的活動を活発に行おうとすれば、まず第一に、関心や興味を強く持ち続けることが必要だ。さらに言えば、関心や興味を育てることが必要である。つまり、自分がおもしろいと思うことを探し出し、遠慮せずにそれに目を向けるようになることである。自分でおもしろくなつたこと、おもしろいと思えなくなつたことをいくら後生大事に抱えていても、そこからは何も生まれてこないのである。

(9) ② 知的情熱としての好奇心に対応する日本語の古語には

「すき」（好き、数奇）があるけれど、なかなか含蓄ある言葉である。たまたま司馬遼太郎・林屋辰三郎両氏の対談集を読んでいたら、その点について示唆的な話に出会つた。すなわち、日本語の「すき」は第一には、気に入ったものに向かつて、ひたすら心が走る、一途になる、熱中するという意味があるが、実はその裏にいわば紙一重のものとして、「歯止めがきかなくなつて不幸な運命を招く。」（数奇な運命）という意味があり、さらに「自由にしたい放題のことをする。」（好きになります）という意味もある。ここに日本語の「すき」が非常にきわどい言葉、きわどい心のあり方であることがわかるだろう、と。この「すき」のきわどさも、私たちは十分心得ておくべきだろう。

(10) 好奇心とは、新鮮な気持ちで物事に出会つておどろきを感じる心であり、知ることへの情熱である。愛・知（ライロ・ソフィア）というのも、もともとはそういうものであつたはずなのである。

問一、著者は「好奇心」をなんと例えているでしょうか。(1)～(3)段落の中から書き出しなさい。

問二、文中の（①）に入る語を次から選び記号で答えなさい。

(ア) すなわち (イ) つまり (ウ) しかし (エ) さらに

問三、傍線部①の情念の悪い面とはどのようなことか。文章中から「情念とは」に続き二十三次で抜き出せ。

問四、傍線部②「知的情熱として……」とあるが、日本語での「すき」という言葉の表面的な意味は何か。「く」という意味につながるようには、三十二次で抜き出しなさい。（句読点を含む。）

問五、「好奇心」と似た意味の言葉を本文中から漢字二字で見つけ出しなさい。

問六、次の文章の□に当てはまる言葉素、本文中から五文字で抜き出せ。
知的活動を有意義におこなう上で最も大切なのは、□である。

正解例・解説

問一、「知的情熱」

(イ) 段落で「好奇心とはくつまり知的情熱にはかならない」と書いてある。

問二、(ウ) しかし

語の内容を理解して、文章に合う接続語を選ぶ。

問三、人間の心の平等を乱し、人間の真理を遠ざけるもの

問四、気に入ったものに向かつて、ひたすら心が走る、一途になる、熱中するという意味。

(6) 段落に注目すると、「その裏」という言葉がある。「その」は指示語なので、オレより前の文のこと、「裏」ということは「表」のことも説明されている。また同じく「という意味」を見つけると、答えと同じ形であることがわかる。

問五、「興味」「関心」

問六、関心や興味 (8)段落より